

IZO(以蔵)

2004(平成16)年8月22日鑑賞(ホクテンザ1)



監督＝三池崇史／企画・原案・脚本＝武知鎮典／スーパーバイザー＝奥山和由／出演＝中山一也／友川かずき／松田龍平／美木良介／ビートたけし／桃井かおり（チームオクヤマ配給／2004年日本映画／128分）

第4章

スカッとスッキリ

……幕末の京都で「人斬り以蔵」と恐れられた岡田以蔵が、位相の世界（過去・現在・未来を結ぶ空間）の中で、斬って斬って斬りまくる……という何とも不可解で奇想天外な三池崇史監督作品。俳優陣はオールキャストで豪華だが、さてその中身は……？

君は岡田以蔵を知っているか？

「幕末モノ」が好きな人なら、誰でも岡田以蔵を知っているはず。また、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を読んだ人も、当然、知っているはず。他方、武市半平太を知っている人の方が多いだろう。なぜなら、武市半平太は、坂本龍馬より知名度は劣るものの、一応著名人(?)だから……。武市半平太は土佐勤皇党のボスで、坂本龍馬とは比べものにならないほど高い地位の武士。岡田以蔵は、武市半平太のロボットのように、その命令に従って、幕府の要人の暗殺を続けたテロリストとして有名な人物だ。したがって、岡田以蔵の別名は、「人斬り以蔵」！ IZOとは、この岡田以蔵が、イエス・キリストのように、十字架で磔にされた後、その魂が時空を超えて蘇り、現代の東京に降臨した「もの」……？ IZOの怨念は、かつて自分に「天誅」の名の下に、殺人鬼となることを命じた、武市半平太に対して燃えあがったというのだが……？

はじめて観た三池崇史監督作品

三池崇史監督は、驚異的なペースで、次々と話題作、問題作を世に送り出して

いる監督で、最近の作品は『着信あり』（04年）。パンフレットにのっている三池監督の作品はたくさんあるが、私は基本的にこの手の映画は好きではないので、実は全く観ていない。今回の、この『IZO』にしても、こういう作り方の映画だとわかっていれば、観ていなかったかも……？ 約1週間前に観た予告編がすごく「刺激的」だったことと、岡田以蔵という人物そのものに、昔から興味があったために、公開直後の日曜日の晩、わざわざ観にいったのだが……。

ワケわからん！ 好きか嫌いか？

この映画は要するに、IZO（中山一也）が、途中で立ちはだかる男たちや、送り込まれてくる刺客たちを、斬って斬って斬りまくるという映画で、とにかく、最初から最後まで血しぶきが飛びかう映画。もっともパンフレットの解説によると、この世とは違う位相の世界、すなわち過去・現在・未来を結ぶ空間の中を駆け抜けながら、その位相の世界を把握している権力の中枢である貴族院（何と、その位相の絶対者が殿下こと松田龍平、そして宰相がビートたけし、財界のドンが曾根晴美、官僚の長が岡田真澄、軍閥の将軍が片岡鶴太郎、学界のドンが篠田三郎というもの）や、かつてのボス、ハンバイタ（美木良介）に向かってIZOの怨念や怒りをぶつけていくというもの。

そりゃ、何らかの理屈はあるのだろうが、とにかく私にはワケわからん！ スクリーン上には、日本の有名な俳優たちがオールスターで登場するが、IZOは、とにかくこの役者たちを、斬って斬って斬りまくるだけ。いい加減、疲れてくるというもの……。しかし、好きな人は、やはりこれが好きなのかも……？

語る言葉は難解で、哲学的だが……？

テーマがテーマだけに、ストーリー展開の中で語られる言葉は結構難解で哲学的……？ しかし、ちょっとしゃべっていると、その後に続く言葉はだいたい想像がつくもので、それほど高尚なことをしゃべっているわけではない。私に言わせれば、昔の学生運動華やかなりし時代に、多くの学生が好んで使っていたような抽象語・哲学用語を使った「概念遊び」という感が強い……？ そこまで言うと、三池崇史監督や企画・原案・脚本をした武知鎮典氏、そしてスーパーバイザ

ーである奥山和由氏から怒られるかも……？

ギターの弾き語りのウエイト大！

この映画では、友川かずきがスクリーン上に再三登場し、かなりの時間をギターの弾き語りにあてている。たしかに、友川かずきによる数曲のギターの弾き語りは魅力的。しかし、あまり何回も出てくると……？ もちろん、ギターの弾き語りは時空の上では現在の話……？ 念のため……。

桃井かおりだけは、いい役柄

IZOの前に現れる人間は、次から次へと斬られていくが、1人だけ違う扱いを受けるのは、桃井かおり演じるサヤ。このサヤは、自分とIZOは前世から結ばれていたと語り、「わたしはお前の魂の片割れ……お前と出会うべき定め……」と訴えた。血しぶきが飛び散るシーンが連続の中、この桃井かおりの登場場面だけが一時のやすらぎ……？

幕末・戦前・戦後、そして現代ニッポン

IZOやハンペイタは幕末の人間。そして、その時代をめぐっては、剣豪の緒形拳や浪人の魔姿斗らが登場するが、位相の貴族院を支配しているのは戦前・戦後時代の人たちで、その典型が軍閥の将軍、片岡鶴太郎。そして、現代ニッポンからは、いかにもお似合いのヤクザのボス松方弘樹から、SATの隊長やヤンキーの若者に至るまで多くの人物が、次から次へと登場してIZOと対決し殺されていく。そしてその間に、何回も何回も流れる歴史的に貴重なニュース映像の数々。それらは私たち多くの日本人にとって、おなじみの映像だけに、その貴重な歴史的映像ニュースが伝える真実と、この映画がつくり出している虚構の世界（位相の世界）とが大きくかけ離れており、その違和感は極めて大きいものがある。1904年の日露戦争から100年を迎えた2004年の今、日露戦争についてはさまざまな特集が組まれて検討されているが、明治維新から今日までの日本の歴史は、もっと真摯に見つめ学ぶ必要があるのではないかと私は思っているのだが……？

2004(平成16)年8月28日記